煎茶は自ら娯しむもの

―― 田能村竹田の美学に関する一考察 ――

島村幸忠

1

江戸時代の文化・文政期（1804-1830）に活躍した多くの文人たちのなかでも、特に文人らしい典型的な生活を送ったひとりに田能村竹田（名は孝憲、通称は竹蔵、字は君彝、竹田は号のひとつ、1777-1835）がいる。たとえば、中村幸彦は「近世文人意識の成立」のなかで、日本の文人の特徴として、多芸性、反俗性、隠逸性、孤高性の四つをあげ、竹田について以下のように述べている。

> もし享保以来、時々あらわれた文人達に一本の系譜がひかれるとすれば、その正系譜の上にあって、幕末の最も注目すべき文人は田能村竹田（安永六年 — 天保六年）である。その文人画の大家、煎茶道の伝統云々の具体面のみならず、精神においてもしかりである。
>
> （中村 1959，401-402 頁.）

竹田においては「全身をうち込んだ画業や詩作、書や茶や、読書や旅行が生活そのもの」（中村 1959，402 頁）であった。これら今日でいうところの芸術的行為のなかに煎茶が含まれている背景には、当時の文人文化の潮流がある。「文化文政期以後の文人たちにとっては文房に煎茶の喫茶趣味のあることは当たり前の時代」（守屋 1997，560 頁）だったのだ。その当時の煎茶文化を知るのに竹田が重要なのは、彼が煎茶に関する多くの詩書画を残しているというだけでなく、天保 2 年（1831）には、三冊の煎茶書『泡茶新書三種』（『石山斎茶具図譜』、『竹田荘茶説』、『竹田荘泡茶訣』）を上梓しているからでもある。それゆえ、これまでに行われてきた煎茶の文化研究において、竹田は他の文人煎茶家に比して多く論じられてきたといえる。

竹田の煎茶に関する主な先行研究としては、楢林の『碧山へ夢』（1985）、岩間の「煎茶と文人画」（1998）、舩阪の「田能村竹田の詩文にみる煎茶」（2003）などが挙げられる[1]。まず、楢林は竹田と煎茶との関係を、特に竹田の交友関係を中

1　他にも、長谷川瀟々居『煎茶志』（平凡社, 1965 年）、村井康彦「田能村竹田 —— 文人と茶 ——」

心に年代を追って跡付けており、瀬戸内から京阪にかけてのそれのみならず、他の文献ではそれ程触れられていない長崎での交友にも言及している。次に、舩阪は文化 12 年に書かれた「煎茶賦」を中心に扱うことで、煎茶が中国の文人たちへの憧れ、あるいは彼らとの精神的な紐帯になっていることを示している。また、そのような精神性は、竹田がしばしば船の上で茶を喫していたことにもあらわれているという。そして、竹田が抹茶と煎茶を対立させるのではなく、むしろ並列させて考えていたのは、中国文人の世界観を理解するためであったとも指摘されている。最後に、岩間が論じているのは、竹田における茶が彼の詩や絵画の創作と同様に創造性を持っているということである。例えば、絵画においても煎茶においても、心の「清」や「淡」が関係しているのだ。そのなかで、竹田の創作において重要な概念である「自娯」が注目される。しかし、そこでは抹茶について書かれた「葉のうらの記」（成立は文化年間中期）が引き合いに出されているだけで[2]、特に煎茶との具体的な関係は論じられることはなかった。そこで本論では、以上の岩間の指摘を引き継ぎ、竹田の煎茶と「自娯」との関係について考察していくことにする。実際のところ、竹田の芸術論『山中人饒舌』や画賛を集めた『自画題語』などを紐解けば、「自娯」が彼の芸術観においては言うまでもなく、彼の茶観においても重要な意味を持っていると考えられるのだ。

ところで、煎茶は文人たちの集まる場、すなわち所謂「文人サロン」[3]の中心にあったのであり、その意味で、人と人とを結びつけるものであった。事実、竹田自身が『竹田荘茶説』のなかで、「此書ハ唐土の茶の点方を今日に用ひ行ふやふに考へて同人相会し山に登り水に臨み詩を論じ画を評する時の一助とす」（竹田『竹田荘茶説』399 頁）と述べている。また、彼の白眉《亦々一楽帖》の第 2 図《心友交歓図》の賛には、「同心の友と相会し、随意に快談し、稍倦めば則ち茗を煮、酒を温む。或は古の法書名画を展観し、古今を論確し、真贋を鑑別して、閑を銷し、興を遣るも、亦復一楽」（竹田『自画題語』（続編巻之三）213 頁）とある。そのような煎茶の役割に対して、それを「自ら娯しむ」という行為は煎茶のまた別の働きを示しているのではないだろうか。

しかし、だからと言って、竹田における「自娯」と煎茶の結びつきが、稀有な

『淡交』（221）（淡交社, 1974 年）、佃一輝『煎茶の旅 —— 文人の足跡を訪ねて』（大阪書籍, 1985 年）などがある。

2 「葉のうらの記」には「荒にし宿のしづけき窓の下に、独して香きゝ茶たつる程楽しきはなし、かりにも人をし慰めんと思へばこそ、えがたき器をもかゝづらひあつめ、聞のあたりあたらぬをもきそふ心は出でくなれ」（竹田「葉のうらの記」224 頁）とある。

3 「文人サロン」については、森谷尅久「文人サロンの形成」『芸能史研究』（31）（芸能史研究会，1970 年）33-40 頁を参照のこと。

事例であったというわけでもない。「煎茶の理念と表現」（2014）のなかで佃は、煎茶文化における「自娯」の重要性を説いている。彼によれば、文人の理想とする「清」へと至るには「自然」な生き方や表現が必要とされる。そこに繋がる実践的な美的理念として「自娯」と「去俗」があるのだ。「自娯」とは、仲長統や陶淵明などの中国明代の文人が中心となって用いた理念であるが[4]、それは実際に山の中に籠るのではなく、町のなかで体現されるものであったという。「自娯」は、平俗のなかに居ながらそこから抜け出すことを、すなわち「去俗」（あるいは隠逸）を可能にしてくれる一つの要素であったのだ。そして、そのような中国文人の美学は日本の文人にも受け継がれた。佃によれば、この「自娯」は後の日本での煎茶会の様子にも伺えるという。

以上で論じてきたことに鑑みれば、竹田における「自娯」と煎茶との関係について考えることで、煎茶文化に秘められた精神性のある側面を明らかにすることができるだろう。そこで以下ではまず、竹田の芸術理論における「自娯」について再考する。「自娯」は、やはり何よりもまず彼の創作に関係しているからだ。そして次に、煎茶と「自娯」が結び付けられている竹田の作品を確認していく。そうすることで、竹田の茶観の一側面を明らかにしたい。

2

竹田は「自娯」について『山中人饒舌』第69則で述べている。まずは、当該箇所を以下に引用しよう。

> 文泉子云う、夫れ十たび文を為るも、十たび意の如くなるを得ずと。画に於ても亦然り。而して少しく意の如くなるに遇へば、之れを観て自娯し、蔵して幣帚を享す。あるいは人篋笥を探りて取り去る有れば、悵然たること之れを久しくす。嘗て人の為に梅を写し句を題して云う、老萱女を嫁す情相似たり、唯要す終身留め得て看るをと。後に李竹嬾の画媵を閲す、句有りて云う、画成りて未だ擬せず人の将り去るを、茶熟し香温かにして且く自ら見ると。画の工不工は、固より敢えて言わず。其の愛に溺るるに至りては一なり。一笑を発すべし。
>
> （竹田『山中人饒舌』，28頁，ただし傍点は引用者.）

4　実際には、『荘子』のなかに、また福田由布の「蘇軾の人生哲学と「書」制作」（広島大学総合科学研究科に提出された博士論文，2014年）によれば蘇東坡も用いている。

引用箇所で竹田は、画というのはなかなか思うようには書けるものではないが、思うように描けたものは自分で楽しむのが好い。それゆえに、その画を人に与えるのは、愛娘を嫁に取られるようなものである、と晩唐の文筆家・文泉子の言を借りて述べている。そして、明の文人画家・李竹嬾（名を日華という。竹田は、同書の第 95 則でも彼の名を挙げている）の「画成りて未だ擬ぜず人の将り去るを、茶熟し香温かにして且く自ら見る」という言を引用し、未だ人の手に渡っていない自分の画を、茶を喫しつつ鑑賞するのが楽しみであるとしている。ここで引用されている竹嬾の喫茶に関しては、井上が「『竹嬾茶衡』拾遺」（2011）で詳しく論じており、竹嬾の文人生活においては茶が欠かせないものであったことが理解される。同論文によれば、竹田が引用している「画成りて未だ擬せず人の将り去るを」という部分の前の箇所で、竹嬾は、自分の描いた画のなかでも意に即したものが出来上がったときには、それにのめり込んでしまう、というようなことを述べている（井上 2011，55 頁）。そこで竹嬾が言わんとしていることは、上で確認した文泉子の言葉とほとんど同じものである。それにもかかわらず、竹田が文泉子の言葉をわざわざ引用しているのは、「自娯」という語にこだわりを持っていたからではないだろうか。また、逆に言えば、茶や香が竹田においても非常に重要な要素であったとも言える。

さて、竹田の「自娯」は、ただ文字通りに作品を、あるいは茶を「自ら娯しむ」ことが言いたいがためだけに用いられているわけではない。多くの先行研究がすでに指摘してきたように、作品の制作にも関わっているのだ。そのことを確認するためには、例えば、同書の第 62 則に出てくる「自娯」を見ればよい。そこで竹田は、浪速の知の巨人で煎茶家でもあった木村蒹葭堂（1736-1802）を取り上げ、彼の画について以下のように論じている。

> 山水、蘭竹、窠石の小幅を善くし、間雅清穏、法を近世に撫す。其の意蓋し自娯にあり。必ずしも古人に抗衡し倶には上乗を争はず、而して一片酣古の気、靄然として自ら見はる。
>
> （竹田『山中人饒舌』26 頁，ただし傍点は引用者.）

竹田によれば、蒹葭堂は画を「自娯」のために描いている。それゆえ、彼の画は先人と争うことを意図していない。むしろ、そこには古に酔い楽しむ気が、雲がたなびいているかのように一面にあらわれているという。つまり、ここでの論点は二つある。一つ目は、自らのために描くということ、二つ目は、古に学ぶということである。まず、前者についてだが、竹田は同書第 5 則で、当代の書画家は古の者よりも優れた知識と技巧を有しているにもかかわらず、古の者より優れ

た作品を制作することができないことを述べている。その理由として、『論語』「憲法第十四」の「古の学者は己の為にし、今の学者は人の為にす」（『論語』287 頁）という言葉が引用される。人の為に作るような書画はますます詰まらないものものになり、低俗なものになるというのだ（竹谷 1975，60 頁）。ここで言われていることを反対に取れば、竹田は、書画とは自分の為に作られるものでなければならない、と考えていたということになる[5]。

二つ目の論点は一つ目のものに関連するものである。中田も指摘している通り、竹田は古人の技術にではなく、心に学ぶことを非常に重視していた（中田 1982，325-326 頁）。竹田自身、『山中人饒舌』の第 86、87、91 則などにおいて、当代の人が古人に学ぼうとしないことを嘆き、そこから学ぶことの大切さを説いている。またこれに関しては、『山中人饒舌』の序文で大阪の文人・角田九華（1784-1856）が、「書画を治る者は、胸中に完局有り、能く古人の心を得て、而も其の迹に拘泥せず、似れども似ず、合はざさども合ひ、其の布置間架、一に自家より出づれば、則ち書画の神法、活発流動して、千載も窮らざるなり」（九華『山中人饒舌』2 頁）と記している。すなわち、先人に学び、その心を知ることが大切だが、それは決して真似をするのではない。それで、自分のなかから構図や構成が出てくるようになれば、幾らでも描き続けることができるというのである。ここで言われている「完局」は、竹谷によれば、書物を読むことで得られるもののことである（竹谷 1975，35 頁）。

読書こそ、竹田にとって古人の心を学び、良き画が描けれるようになるための重要な行いであった（中田 1982，327-328 頁）。というのも、画には形似を超えて、心を写す必要があるからだ。例えば、同書には、董其昌が説いた文人の理念「万巻の書を読み、万里の路を行く」も引かれているが（竹田『山中人饒舌』7 頁）、他の場所では次のように述べられている。曰く、「近医古方を論じて曰く、万病一毒と。画も亦一毒あり、曰く、書を読まずと」（竹田『山中人饒舌』33 頁）。すなわち、近頃の医者が昔の医術を論じて言うところによれば、すべての病は一つの毒に起因する。それと同様に、画を描くにも一つの毒がある。それは書を読まないという毒である、というのだ。以上が『山中人饒舌』に現れたる「自娯」である。

ところで、この言葉は竹田の作品のなかにも登場し、そこには竹田の芸術論の

5　勿論、現実的には、依頼によって制作することも多かったであろう。ここでの「自娯」はあくまで精神的な理想であると解されるべきである。文人の作品制作とその生計については、梅谷文夫「近世文人の芸術観」『国語と国文学』（39, 4）（至文堂，1962 年）131-140 頁を参照されたい。

さらなる展開が見られる。ここでは、『自画題語』に収められている竹田最晩年の作品《渓山幽意》（1834）の賛・五言律詩を取り上げることにする[6]。

> 我が画は自娯にあり／人をして娯しむるにあらず／毫を運らすに矩度なく／墨を行るに只模糊たり／秋容水の冷やかなるを知り／晩影雲の孤なるを覚ゆ／写し終つて看且つ笑ふ／見るべし拙にして迂なるを
> （竹田「渓山幽意」『自画題語』（続編巻之四）260 頁，ただし傍点は引用者.）

引用の大意は以下の通りである。すなわち、私の作品は自ら娯しむためのものであり、人を娯しめるためのものではない。筆を運ぶ法則はなく、墨もはっきりとしていない。秋のすがたは冷ややかな水のようであり、夕暮れ時の空に孤独に雲が浮いている。その様子を描き終わってから見て笑う。なんと拙であり、また迂であることか、と。引用で言われている「拙」や「迂」は、竹田の芸術論の要石であるとされてきたものである。特に「拙」が重要で、文字通りに取れば、画を描く技術が未熟だということになるが、竹田においてはそれだけではない。例えば、石川によれば、「拙はあくまで拙であるとされるが、それを隠して表面的な巧さにすり替えず在りのままに担うとき、画家の特性を表す言葉となる」（石川 1993, 16 頁）という。この石川の指摘は、上の引用にある「矩度なく」、すなわち決まりがない、という箇所に対応している。法にとらわれないことは、表面的な技巧に縛られないということでもあり、その意味で「拙」なのだ。そもそも「自娯」とは、自らの喜びのために描き、それを観て自ら娯しむことだったので、法に捉われる必要はないだろう。その意味で「自娯」とは、今日の言葉で言う所の自由な表現を可能にするものであり、自由の境地へと至る道であったと言えるだろう[7]。

---

6 《秋晩還山図》（成立年代不詳）の賛では「自娯」と「拙」について以下のように述べられている。「前山日入りて笛声遠く、帰路秋寒し霜樹の間／余詩画の外、復た嗜好なし。詩意を以て画を写し、画趣を以て詩を作る。二者相須て、以て閑興を寓し、聊か自娯を為し、幼より遂に今日に至る。白首紛紜たるも、仍ほ止むるを知らず。溺愛の、人に於ける、亦深いかな。画き畢り自ら識す。竹田生」（竹田「秋晩還山図」『自画題語』（続編巻之一）201 頁）。

7 ただし、ここでの自由は、黒田が主張している自由の自覚としての「自娯」とは異なるものと思われる。彼によれば、山陽などの知友を失った竹田を救ったのが絵画の制作である。それで、「絵を描くということによって癒され、恢復するということは、言い換えれば描くことによる自由の自覚である。描くことの自由。それは、表現者として画家のみに与えられた自由境である。この自由境こそ竹田にとっては何よりも描くことの必然であり、すなわち「自娯」ではなかったか」（黒田 2013，160 頁）という。

以上で、竹田の芸術観における「自娯」について考察してきた。そこで次節では、本説での考察を受け、その「自娯」が如何に煎茶と関係しているのか探っていくことにする。

3

前説の冒頭ですでに確認した通り、『山中人饒舌』第 69 則には、李竹嬾の「画成りて未だ擬せず人の将り去るを、茶熟し香温かにして且く自ら見る」という言が引用され、茶を飲み、香を焚きつつ、自身が描いた画を観る喜びが語られていた。これと同様の状況が《勘書図》の賛と併せて詠まれた詩「読書楽十種」のなかで描かれている。まず、同作品の賛文を以下に示す。

> ［…］但筆墨拙鹵にして工ならず。蓋し意は自娯にあって、人に出示するに非ざるなり。画次偶々読書楽十首を得たり。詩も亦浅薄、格に入るべからず。信に画の匹なり。便ち左に付す。
>
> （竹田「勘書図」『自画題語』（後編巻之三）289-290 頁, ただし傍点は引用者.）

《勘書図》を完成させた経緯についての説明があった後に、上に引用した部分がくる。自身が描いた図を形容して竹田は、「拙鹵にして工ならず」、つまり、つたなくかつ粗野であって、巧妙ではない。というのも、その制作の意図は自ら娯しむためであり、人に見せるようなものではないのだ。一緒に作った詩も同様なので、図に添えるのに丁度よい、と述べている。実は、その一緒に作られた詩のなかに茶に関するものが含まれている。それは以下に示すものである。

> 新茶初めて焙じて荻簾香し／修竹疎桐炎気薄し／足を洗ひ帰り来つて草軒に座す／此の時物の読書の楽しみに比するなし　夏
>
> （竹田「勘書図」『自画題語』（後編巻之三）291 頁.）
>
> 筆牀茶灶遠く家を浮ぶ／妻孥を載せ得て篷底に著く／春は桃花に宿り秋は荻花／此の時物の読書の楽しみに比するなし　舟居
>
> （竹田「勘書図」『自画題語』（後編巻之三）292-293 頁.）

これらの詩も「自娯」のために詠まれたものだが、そこで描かれている読書の楽しみもまた「自娯」の一つの在り方であろう。一つ目は、茶の匂いが残る涼しい部屋で読書する幸せを表している。二つ目については、船阪が「田能村竹田の詩文にみる煎茶」のなかで詳しく論じている。船阪によれば、詩のなかの「筆牀

茶灶」は竹田の詩にしばしば登場する語で、「晩唐の詩人、陸亀蒙が江南の地を暦遊したときに持参した茶具、筆記具を指す」（船阪 2003，60 頁）という。この陸亀蒙は陸での移動よりも、舟での移動を好んだ人物である。幾度となく九州と京阪の間を遊歴し、多くの時間を舟の上で過ごした竹田は、そのような陸亀蒙に強い親近感を抱いていたようである（Cf，船阪 2003，62 頁）。ただし、《勘書図》の賛文を勘案すれば、少し視野を広げ、舟上での生活のなかで、喫茶し、花を見る、そして読書をするという行為全体が「自娯」であったと解すべきであろう。

以上の作品から理解できることは、茶は「自娯」の場を構成する一つの要素となる可能性がある、ということにすぎない。しかし、茶を喫すること自体が「自娯」とされる場合もある。例えば、文政 10 年（1827）の《隠栖喫茶図》（『自画題語』では「杜門煎茶図」）（図１）に記された賛を見てみよう。

> 蝶園老兄、為人活淡和諧、物と忤ふことなし。屏居六十年。茶を煎じて自娯す。頃ろ予が画を徴す。因つて斯の幅を作り、併せて一絶を繫け意を見すと云う。満園の竹樹昼蕭騒／独り茶甌の素濤を翻すを見る／十日門を杜じて唯静を愛す／人に背くは敢えて孤高を作すに非ず
>
> （竹田「勘書図」『自画題語』（後編巻之三）239 頁，ただし傍点は引用者.）

あっさりとして穏和な性格の蝶園が如何なる者かは判然としないが、引用からは、まさに本論の冒頭で触れた文人の特徴をそのまま体現したような人物であることが伺える。ただし竹田によれば、彼はただ一人で静かな場所を好んでいるだけであり、わざわざ孤高であろうとしているわけではない。つまり世間との繫がりを断ち切ろうとする意図は彼にない。ただ、床に竹田の画を掛け、茶甌（急須）の湯が沸く音も聞こえてくるほどの静けさのなか、一人で煎茶を娯しむのである。竹田によれば、彼の「画中の知己」青木木米（1767-1833）もまた蝶園と同じように、煎茶を自ら娯しむ者であった。『竹田荘師友画録』の青木木米の項には以下のような一節がある。

> 予初め其の居を訪うに。甚だ狭窄。鴨水の上に架し。流水湲潺とし。屋下に響く。手もて其の水を汲み茶を煎じて。且つ曰く。此の茶福井榕亭の造る所なり。便ち一絶を贈る。末二句に云う。家園の水は即ち鴨河の水。煎じ出す榕亭老子の茶［…］平日窯を粟田山下に置き。身に綺紈を服し。手に泥土を摶む。之を望めば風標昂然として。阮屐嵇鍜も是に過ぎざるなり。旁らに茶寮を設け。暇日には煎点して自娯す。
>
> （竹田『師友画録』460 頁，ただし傍点は引用者.）

前半の部分は、文政 6 年（1823）5 月 11 日に竹田が木米のもとに初めて訪れたときの様子である。木米は、鴨川から水を汲み、来訪した竹田に茶を煎じ、振るまった。そこで、そのお礼に竹田は詩を詠んだという。その詩は「筝琶粉黛繁華を競う／中に軽煙有り舎を繞いて斜めなり／家園の水は即ち鴨河の水／煎じ出す榕亭老子の茶」というもので、同年に描かれた《木米喫茶図》（図２）の賛をなしている。また、先の引用の後半部分は、木米の昂然とした作陶の姿が活写されている。その姿は、竹林の七賢の阮籍や嵇康よりも立派なものであるという。そして、窯の近くには茶室があり、作陶の暇に木米はそこで煎茶を自ら娯しんでいるという。《木米喫茶図》（図 2）には、風炉の前に独坐し、茶を楽しむ木米の姿が描かれており、あたかもそのように「自娯」の時を過ごす木米の様子が描いているかのようである。

では、竹田自身はどうか。管見の限り、竹田が自身の喫茶を「自娯」という語で語ることはなかったが、自ら娯しむものとして煎茶を捉えている作品は幾つか残されている。例えば、文政 2 年（1819）の「煎茶賦」がその一つだ。この作品は竹田が隠居生活に入り、交友を減らしていたときに作られた。その末尾には、「迺ち歌を作りて曰く、躬ら樵り躬ら汲まば吾何をか羨まん、自ら煮自ら喫さば吾何を恋わん」（竹田「煎茶賦」『逸詩文鈔』552 頁）とあり、喫茶を自ら娯しむ内容のことが言われている。そもそも、「煎茶賦」を書くきっかけとなったのは、一人井戸の水を汲み、茶を煎じて喫したことだったという。

このように見てくれば、喫茶の「自娯」は去俗に通じていることが伺えるだろう。彼らは、社会の繋がりのなかに埋もれていくのではなく、反対に、隠逸性を重んじてもいた。ただし、その隠逸は実際の山人になるというものではない。彼らは、他の者のために入れるのではなく、自らのために入れ、孤独とも異なる彼らの自由の時を享受したのである。

さて、江戸時代の中期に高遊外売茶翁（1675-1763）によって花開いた日本の煎茶文化は、文人たちが集まるサロンを中心に育まれた。そこでの煎茶の主な役割は人と人との紐帯となることであった。それゆえ、煎茶と「自娯」との関係は、煎茶文化のもう一つの側面であるとも言えるのではなかろうか。最後に、以上で考察してきた精神性を、城市に陸沈した売茶翁のなかにも探っておくことにする。

> 瓦鼎 波を翻して 松籟発す／点じ来たって売与す 五湖の人／奈何ぞ 箇の裡味を知る無き／独坐 自煎 等倫を絶す
>
> （「売茶口占十二首」（十）『売茶翁偈語』44-45 頁.）

独り座り、自ら茶を煎じれば、比類を絶した境涯に至れるのだという。ここに挙げた売茶翁の詩は、本稿の第 3 節で扱った竹田が蝶園に与えた詩「独り茶甌の素濤を翻すを見る」を想起させずにはいられない。つまり、売茶翁の精神が竹田へと受け継がれていることは想像に難くないのである（また、竹田の売茶翁像も合わせて参照されたい）。それゆえ、上の詩に表れている精神は、本稿で考察してきた「自娯」に共鳴する部分があると言えるだろう。ただし、竹田においてそれは、宗教的なものというよりもむしろ、詩、書画等の文人趣味に直接的に繋げられていたのであり、自由へと繋がる道であったのだ。

凡例

本論において竹田の著作から引用する際は、作品名、著作名、『田能村竹田資料集』の頁数の順で原典を示す。書き下し文の多くは竹谷の『田能村竹田 画論『山中人饒舌』訳解』と『文人画家 田能村竹田「自画題語」訳解を中心に』、またその他の文献に従った。ただし、適宜変更を加えた箇所もある。その他の著作や論文からの引用及び参照は略号の後に頁数を記してある。

参考文献

竹田『山中人饒舌』；『竹田荘茶説』；『自画題語』；「葉のうらの記」；『逸詩文鈔』；『師友画録』
大分県教育庁管理部文化課編集『田能村竹田資料集』（著述編）（絵画編）（詩文編）（大分県教育委員会，1992 年）.

『論語』
金谷治訳注『論語』（岩波書店，1999 年）.

『売茶翁偈語』
末木文美士／堀川貴司注『江戸漢詩選』（5）（岩波書店，1996）.

中村 1959
中村幸彦「近世文人意識の成立」（1959）『中村幸彦著述集』（11）（中央公論社，1982 年）.

竹谷 1975；1977；1981
竹谷長二郎『田能村竹田 画論『山中人饒舌』訳解』（1975 年）（笠間書院，2003 年）；『竹田荘師友画録訳解』（笠間選書，69）（笠間書院，1977 年）；『文人画家 田能村竹田「自画題語」訳解を中心に』（明治書院，1981 年）.

楢林 1985
『碧山への夢』（講談社，1985 年）.

石川 1993
石川千佳子「田能村竹田の画論における「拙」について」『宮崎大学教育学部紀要』（芸術・保健体育・家政・技術）（73）（宮崎大学，1993）13-21 頁.

岩間 1998
岩間眞知子「煎茶と文人画 —— 田能村竹田と煎茶 ——」『日本美術襍稿』（佐々木剛三先生古稀記念論文集）（明徳出版社，1998 年）463-490 頁.

船阪 2003

舩阪富美子「田能村竹田の詩文にみる煎茶」『和漢比較文学』(31)（和漢比較文学会、2003 年），57-71 頁.

井上 2011

井上充幸「『竹嬾茶衡』拾遺 —— 明末の文人李日華の喫茶生活 ——」『東アジアの茶飲文化と茶業』（周縁の文化交渉学シリーズ 1）（関西大学文化交渉学教育研究拠点，2011 年）.

黒田 2013

黒田泰三「田能村竹田の「自娯」と「拙」——『古画備考』における竹田観にふれて ——」古画備考研究会編『原本「古画備考」のネットワーク』（思文閣出版, 2013 年）147-169 頁.

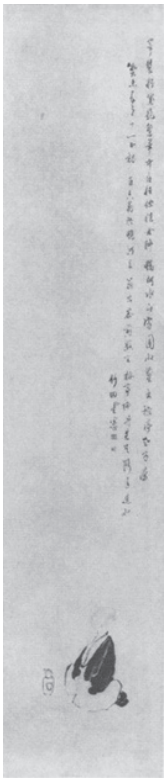
佃 2014

佃一輝「煎茶の理念と表現」『講座 日本茶の湯全史』(2)（思文閣出版, 2014 年）211-241 頁.

【図 1】

《隠栖喫茶図》文政 10 年
紙本著色　45.5 × 67.6

【図 2】



《木米喫茶図》文政 6 年　紙本墨画
121 × 26.9
出光美術館